

農業経験ゼロから売上1千万円超を目指す

祖父母が住んでいた河辺にIターンし、平成30年からキュウリ栽培を始めて8年経ちました。宇和島市の漁師の家に生まれ、海上自衛隊に所属した後、県外の自動車部品製造会社で働いていましたが、家族の健康を考え、都会ではできない自由な暮らしを求めて、河辺への移住を決めました。

河辺で暮らし始め、地元の人に紹介してもらった農地は昔、たばこ畑だった耕作放棄地で、生い茂った雑木をきれいに伐採、伐根し、就農1年目に平らな農地37アールをつくりました。標高が高い河辺で栽培するならキュウリかトマトが適していると先輩農家から助言をもらい、ハウス設備などの初期投資がいらぬ夏秋キュウリで生計を立てることにしました。私にとって、キュウリ栽培は生業であり、河辺で生きていくための収入を得る大切な手段です。農地も施設設備も持たず、ゼロからスタートでしたので、農業以外の経営者の教えも参考に、融資を活用しながら、自分の体ひとつでできる範囲で収益の最大化を目指しました。現在、経営面積は1.5ヘクタールになり、当初は1千本が限界と考えていたキュウリ苗を現在、2千本に増やし、パートタイム3人が収穫作業に加わることで、経営の規模拡大と安定化を図っています。

収益確保のためには、県外のキュウリ産地からの供給がピークを過ぎた時、自分がどれだけ多く出荷できるかが重要です。毎年、エルニーニョ現象、ラニーニャ現象などの気象予想を参考に、収穫したい時期から逆算して春の苗植え時期を決めるなどの工夫をしています。

全国各地でさまざまな農作物が生産されていますが、地球温暖化の影響から、将来も同じ作物を今と同じ地域で生産できる保証はありません。年間売上目標を達成した今も、品目にこだわらず何にでも挑戦する気持ちで、儲かる農業を目指していこうと思っています。

未来を拓く

～次代へつなぐ～



河辺地域にIターンした キュウリ生産者

たくや
末浪 卓也 さん

新規就農者や学生たちとも交流を深め、無駄のない合理的経営の大切さを伝える。「子供3人も皆独立し、地元で看護師として働く妻と二人で田舎暮らしを満喫しています」と語る43歳。

大洲の風景



上須戒のヒマワリ 8月26日(水) 撮影

今月の表紙

8月28日(金)に開催された「いもたき初煮会」での一枚。

炊き上がったいもたきを大きな鍋からお椀によそい、職場のみなさんで秋の味覚を楽しみました。

